別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　古村　健

本論文は，統合失調症を中心とした重篤な精神障害で体験される命令幻聴を対象とした臨床心理学研究である。命令幻聴には自傷他害におよぶ危険な命令が含まれており，それへの服従は重大な社会的問題に発展する可能性がある。本論文では，こうした服従行動を予測し，制御するために，服従行動に影響する命令幻聴の成分と認知的要因を実証的に検討した。

本論文は大きく3つの研究で構成されている。また，総合考察では実践的な臨床的示唆について触れている。

第1章は，統合失調症を対象の中心に設定した先行研究を網羅的に概観した文献研究である。まず，命令幻聴の体験率を明らかにした。次に，命令幻聴への服従行動に関する操作的定義を適切に整理し，服従行動発生の頻度を明らかにした。さらに，服従行動に影響する認知的要因に関して，先行研究における測定方法の不備や結果の矛盾を指摘し，服従行動を予測し，制御する要因の詳細な検証が必要であることを明らかにした。

第2章は，命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因と考えられる否定的個人評価を測定する尺度の作成を行った。評価的信念尺度Evaluative Beliefs Scale日本語版（JEBS）を作成し，大学生と社会人に対する大規模調査を実施することによって，十分な信頼性と妥当性があることを確認した。この研究結果は「精神医学」誌に掲載された。

第3章では，持続性幻聴をもつ統合失調症患者の調査研究を行った。幻聴の内容と形式，幻聴についての認知，一般的特性の各要素と，服従行動との関連性を検討した。その結果，「幻聴の明瞭性」「幻聴の全能性の認知」「否定的自己評価」の3つが服従行動の予測要因になりうることを明らかにした。

以上のように，本論文では，網羅的文献研究に基づき，必要な尺度開発を経て，臨床群における調査を実施することによって，命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因を明らかにした。当該研究領域における本論文の独自性は，(1) 幻聴の形式的側面と服従行動との関連性について定量的測定尺度を用いて実証したこと，(2) 服従行動における否定的自己評価の役割を明らかにしたこと，の２点である。これらは，命令幻聴の病理研究と心理社会的介入法の発展に大きく寄与すると考えられる。

本論文の審査会では次のような指摘があった。まず，本論文の臨床調査における対象患者は，全例が危険な命令幻聴を体験したり，服従したりしているわけではない点である。対象患者は「標準的な薬物療法によって一定の治療効果を得ながらも幻聴体験が持続している統合失調症患者」と広く定義されるのが妥当な群であった。このことは，研究目的から考えれば研究方法の限界として指摘できる。しかしながら，自傷他害の危険のない（無害な）命令幻聴への服従行動も，危険な命令幻聴への服従行動のリスク要因であることが先行研究で明らかにされており，本論文で見出された予測要因は，重大な問題を引き起こさないため

の予防的介入標的として重要だと考えられた。次に，命令幻聴の内容と服従行動に文化的影響が考慮されていない点が指摘された。命令幻聴全般に関して，日本では実証的な研究が乏しく，諸外国との比較ができない状況が続いている。そのため，本論文のような研究が発展することによって，はじめて文化的異同を検討できることになる。幻聴の生理的発生機序が考慮されていない点も含めて，当該研究領域における今後の検討課題であるといえる。以上の論点を明確にするよう修正を行った。

以上のような論文および最終試験の結果から，東京大学大学院総合文化研究科における博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと本審査委員会は認定する。